

「2025 年度東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学研究科 修士課程2年 野下智則

① 学習成果

本ワークショップは、8月18日から8月23日までの5泊6日の日程で、国立台湾大学で開催されたワークショップである。開催校の国立台湾大学の学生と教員の他、日本から京都大学の学生と教員が、韓国からソウル大学の学生と教員が参加して、互いの研究を発表し、交流を深めた。今回はこのワークショップから学んだことを報告する。

このワークショップで一番印象深かったことを、二つ取り上げよう。一つは、台湾社会における政治的立場の多様性を知ることができたことだ。もう一つは、主に台湾の学生が、日本の政治状況に非常に大きな関心を寄せていたことである。

一つ目の政治的立場の多様性は、民進党政権の推し進める軍事化の進展に対する立場から見ることもできた。台湾大学の教員の中には民進党の推し進める軍事化に支持を表明する人がいた。台湾大学の学生たちとはというと、表立ってそれに賛意を示すでもなく反対の意を示すでもなく沈黙していた。が、よくよく話した学生たちは、民進党が打ち出す台湾独立のストーリーを、事態を過度に単純化したものと捉えていて、飽き飽きしている様子だった。

二つ目の政治状況への高い関心について言えば、日本国内で排外主義的な主張をする個人や政党に注目が集まっていることについて、台湾の学生からよく聞かれたことがあった。何故このタイミングで、排外主義的な主張が取り沙汰されるようになったのか、自分なりに言葉を尽くして説明した。

このように、ワークショップを通じて、自分の研究や発表を磨き上げるのみならず、台湾社会と自分の暮らす社会の異同への見識が深まったのが、今回の学習成果だったと言える。

② 海外での経験

今回、私は台湾に初めての渡航を果たした。海外での経験という点で印象深かったのは食事である。ベジタリアンに対応したメニューを出している店がそれなりにあるし、ベジタリアンだと表明する台湾大学の学生もまま見られた。民族宗教を信仰していて牛肉を食べない人、仏教を信仰していて動物性の食品を一切食べない人、皿に肉が載って

いてもよけて口に運ばなければいいというマイルドな考えの人、色んな人がいた。

信仰も違えば、食べられるものも違う人たちが、口にすることは違うものの、毎晩のように食卓を共に囲んだのは、私にとっては新鮮な経験だった。

③ プログラム内容

初日、8月18日には基調講演があり、8月19日と20日には、学生による研究発表が行われた。8月21日以降にはフィールドトリップが行われ、龍山寺等の宗教施設や台湾の立法院を巡った。

映画館で、民進党の蔡英文についての映画を観るという機会も与えられた。よく言えば台湾の民主化、中華民国の台湾化の正の側面に光を当てたもので、悪く言えば国民党を悪役にして、二項対立的な映画に描いていたと思う。その映画の感想を台湾の学生とやりとりする中で、冒頭のように台湾の複雑な政治状況についてやりとりするに至った。

また、台湾の民主化の正の側面に関していえば、LGBTQ+の若者を支援する団体に訪問し、同性婚の法制化を含めて、台湾のLGBT運動の歴史的展開について聞く機会もあった。

④ 進路への影響

私は大学院の博士課程に進学予定で、若年層の性行動に関する研究を行っている。現在の研究では、若年層が十分に性教育を受けていないことによって、女性の自己決定権が侵害されていることがわかっている。

LGBTQ+の包摂に取り組んでいる台湾社会ではあったが、性教育の実情を聞くと、日本の公立学校と大差がなさそうだった。信仰している宗教の分布や政治状況の違いはあるものの、離婚規範等、台湾の社会と日本の社会とは東アジアのグループとして似ていると指摘されることも多い。

今後も台湾社会への関心を持ち、若年層の性行動という観点から、将来的には、東アジアを含むアジア諸国・諸地域の比較研究に取り組んでみたいと思う。